

聖書:列王記第一16章1~20節

説教:ちりから引き上げられた者

はじめに

ソロモンが亡くなった後、イスラエルは北王国と南王国の二つの国に分裂し、それぞれが王様を立てて独自の道を歩んでいく様子がこの列王記に書かれています。今回はバアシャという人物が、謀反を企て北王国の初代の王となったヤロブアムの一族を根絶やしにするのを見ました。ヤロブアムが、権力を使ってほかの神々を拝むように民たちを指導し、主の怒りを引き起こしたゆえでした。今日はバアシャと、それに続々三人の王たちを見ながら、ここに神のどのような御心が示されているのかを考えていきます。

1 四人の王

1) バアシャ

まずバアシャから見ていくのですが、彼がまだ王として健在であったとき、神は預言者エフーを遣わし、次のようなことを語らせるところから始まります。2~4節。「わたしは、あなたをちりから引き上げ、わたしの民イスラエルの君主としたが、あなたはヤロブアムの道に歩み、わたしの民イスラエルに罪を犯させ、その罪によってわたしの怒りを引き起こした。今、わたしはバアシャとその家を除き去り、あなたの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにする。バアシャに属する者で、町で死ぬ者は犬がこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。」

2) エラ、ジムリ、オムリ

このことは、バアシャが亡くなり、彼の子であったエラが跡を継いで王となって二年経ったときに実現します。宴会の席でエラが酒に酔っている隙を突いて、彼の家来で戦車隊のリーダーをしていたジムリが謀反を起こし、殺してしまいます。もちろん思いつきでこのようなことをしたのではない。ジムリは、かなり用意周到に計画し、慎重に機会を見計らっていたのでしょう。エラを殺した後、時をおかずしてただちにバアシャの一族を子どもも女性も親類も友人たちも、すべての関係者を虐殺してしまいます。これでクーデターは成功したかに見えましたが、肝心の軍隊の掌握に失敗してしまう。このときのイスラエル軍の将軍であったオムリは、主君を殺したジムリこそ本当の敵であると軍を説得すると、軍隊はオムリ支持にまわる。ここに至って

ジムリは万事休す。王宮に火を放って自ら命を絶ってしまいます。彼が王の座につけたのはたった七日間。実にめまぐるしく次々と王が交代していきます。

今日の箇所にかかれていたことを簡単にまとめればこのような内容です。先週に引き続き、王の座という権力を巡って人の血が流されていく。いったいどこに恵みがあるのかとうんざりするかも知れません。でもいつも言いますが、聖書にはどこを開こうとも私たちの救いのために神が語ってくださった神のことばが記されていると信じます。では、いったいどこに救いが記されているのか。

2 預言者エフー

1) あなた(バアシャ)をちりから引き上げた

そのことを考えるてがかりとして、預言者エフーが語ったことばを見ていきます。その中でもよく理解できない困惑するような内容を三つ取り上げます。

その一つ目。2節の最初。「わたしは、あなたをちりから引き上げ、わたしの民イスラエルの君主とした。」

先ほど見たようにバアシャは自分の主人を裏切り、ただ自分の力を頼りにして王の座を奪い取った人です。そこに神の助けがあったとは到底思えません。ところが神は意外なことを言われる。神が、バアシャを土のちりから引き上げ、イスラエルの君主にした。バアシャは自分の力で王となったのではない、と言われるのです。これはいったいどういうことか。

2) わたしの民に罪を犯させた

わからないことはまだあります。バアシャをイスラエルの君主としたのが神であるというのであれば、私たちは、バアシャが神のみこころに沿ったことをするだろうと予想するわけです。ところが実際はむしろ神のみこころに反することをしてしまう。「あなたはヤロブアムの道に歩んだ」と言われる。具体的に言えば、イスラエルの神を捨て、ヤロブアムが造った二つの金の子牛を、これが私たちの神であると拝むように強制していったことを指します。その結果、「わたしの民イスラエルに罪を犯させた」と言われてしまう。

ここで二つ目の疑問が生まれます。バアシャが神を捨ててひどいことをすることは神はご存じだっ

たはずです。それなのにイスラエルの君主に立てたのはなぜなのか。これもわからない。

3) ヤロブアムを殺したから

そして三つ目の疑問。神がわざわざ預言者エフーを遣わして語らせた理由が7節に書かれてあるのですが、その最後にこうある。「また彼がヤロブアムを打ち殺したからである。」

実際バアシャがしたのはヤロブアムの子ナダブとその一族であって、ヤロブアムを直接手にかけたわけではない。でも聖書では、ヤロブアムを打ち殺したと言われています。

問題なのはこれをどう考えるかです。バアシャがヤロブアムの一族を根絶やしにしたのは事実でしょう。でもそれはバアシャ一人が独断でやったことだったのか。神のみこころにまったくなかったことを、バアシャが勝手にやったというのなら、バアシャの罪が問われるのは理解できる。でもそうではない。神がこのことに関与していたことが聖書に書かれています。

話はヤロブアムの子どもが病気になったときにさかのぼります。ヤロブアムは、子どもが助かるということばをもらいたくて、預言者アヒヤの所に自分の妻を送ったことがありました。アヒヤがそのときなんと語ったか。「だから、見よ、わたしはヤロブアムの家にわざわいをもたらす。イスラエルの中の、ヤロブアムに属する小童から奴隷や自由な者に至るまで断ち滅ぼし、人が糞を残らず焼き去るように、ヤロブアムの家の跡を除き去る。」

(14章10節)

これを読めば、ヤロブアムの一族を根絶やしにすることは神のご計画の中で既に決められていたことであつたとだれもが認めるでしょう。ということは、バアシャは勝手にやったのではない。歴史の偶然のということで、たまたまその役割を担うことになっただけではなかったのか。それなのにどうして、ヤロブアムを打ち殺したと言ってその罪を問われなければならないのか。

神の言われることはなんとも不思議です。いったい神は何を考えておられるのか。やることに一貫性がない。神は、気まぐれなのかとさえ考えたくなる。もちろん神が気まぐれであるはずはありません。必ず意味があるはずです。次にそのことを考えます。

3 神

1) わたしの民イスラエル

そこで神はどのような方であるのか、やはりエフーのことばから確認していきます。2節で二回繰り返されていることばがあります。「わたしの民イスラエル。」

金の子牛という偶像を拝み、イスラエルの神を捨てるようなひどいことをしたとしても、神は「わたしの民イスラエル」と呼んでくださる。良いことをしたから愛しているのではありません。ひどいことをしているにもかかわらず、見捨てない。だから神は諦めないで何度も預言者を遣わし、神に立ち返るように説得し続けていく。イスラエルの人たちのしていること見ていると、普通なら、とうの昔にさじを投げるところです。ところが神は、イスラエルを絶対に捨てません。どこまでも、「わたしの民」と呼んで救いの道を備えようとされます。

2) この民のしもべとなる (12章7節)

神がそれほど大切に思っている「わたしの民イスラエル」に、バアシャが罪を犯させた、と言っています。神にとって大切なのは、王ではない。あくまでもイスラエルの民なのです。ということは、神は、民の上に立つ王に対しては格別の資格を求めることになる。どんな資格であつたか。

たくさんある中から今日は一つだけ触れておきます。ソロモンが亡くなったとき、その息子であつたレハブアムに民たちが集まり、税金と強制労働を軽くして欲しい願つたことがありました。そのとき、ソロモンに長年仕えてきた長老たちがレハブアムにこうアドバイスしたのです。「今日、もしあなたがこの民のしもべとなつて彼らに仕え、彼らに答えて親切なことばをかけてやるなら、彼らはいつまでも、あなたのしもべとなるでしょう。」まさにこのことばが、イスラエルの王となる者の資質についての的確に表している。神はこのような王を求めている。ところがほとんどの王はこの条件に合格できない。ただ一人ダビデだけがかろうじて合格したに過ぎなかった。

3) 王を殺す罪 (第一サムエル記24章6節)

さきほどバアシャがヤロブアム王を殺した罪のことを、神はなぜ問いかけてくるのか、その理由は何だろうかと申し上げました。

この疑問に対してだれが答えられるのでしょうか。神の目にかなう王であつたダビデだけが答えることができます。サムエル記第一24章6節にそのことが書かれている。この時、サウルはダビデを殺そうと全国に指名手配し、血眼になって探し回ってい

ました。ダビデはサウルから逃れて洞窟に隠れていたのですが、偶然サウルが用を足すために洞窟に入って来るのですが、サウルはダビデが隠れていることに全く気がつかない。ダビデの部下たちはサウルを殺す絶好のチャンスだとダビデに進言します。ダビデはそのときこう語るのです。「私が主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。彼は主に油注がれた方なのだから。」

神が立てられた王がどんなにひどい王であっても、人が勝手に殺すことは絶対にできない。これがダビデの信仰でした。これでおわかりでしょう。バアシャがヤロブアムを打ち殺したこと。たとえそれが神のご計画の中で定められていたことであっても、バアシャはしてはならなかったことをして、主の怒りを引き起こすことになりました。

4) 仕えるために来られたイエス

このことはバアシャだけの問題ではありません。私たちに跳ね返ってきます。私たちは主イエスに何をしたのか。イスラエルの王として来られた方を私たちは十字架につけて殺してしまったのです。バアシャを見てわかるように、それは主の怒りを引き起こすほどの大変な罪です。けれども私たちはその罪を問われません。なぜですか。バアシャと時代が違うから。神のみこころが変わったから。いい何も変わりません。どんな時代であろうとも神の原則は変わらない。

父なる神は、その責任を私たちに問いかけなかった。その代わりに、イスラエルの王に問いかけた。なぜですか。先ほど見ました。神はイスラエルの王に求めていたのです。王は、民たちのしもべとなって仕えなければならない。

主ご自身が証言しています。「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」(マルコ10章45節)

イエスがイスラエルの王として来られたというのは、そのような意味でした。王である方を殺した私たちの罪の責任を、身代わりとなって引き受けてくださった主を思い起こし、恵みに感謝したいと思います。